
茜と金色

さっく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茜と金色

【Nコード】

N8347U

【作者名】

さっく

【あらすじ】

除霊中の事故で異世界にとばされた横島とタマモ。

そこで出会ったのは同じ年の高校生達……SOS団

元の世界へと戻る方法を探すため、彼らと協力することに。

そこで生まれたものとは――

※『驚愕』未読です。矛盾あってもスルーでお願いしますorz

序章：出会い？

1.

世界を赤く染めていた夕日が沈んだ。すっかり夜の気配が近づいてきている。今日の依頼のファイルに目を通していた美神は、それに気づくと

「シロ、電気点けて」

ソファーに寝転んでいる二人の少女のうち銀髪の少女に声をかける。いつもは何も言わずにおキヌがしてくれるのだが、今事務所におキヌはいない。お盆で里帰りしているためだ。

「わかったでござる」

元気のいい返事と共に立ち上がると電気を点けに走った。

「時に美神殿、何故タマモには頼まないでござるか？」

美神はタマモと呼ばれた金髪のナインテールの少女に目を向けながら、

「あんな状態で使えるわけないでしょ」

といった。タマモはこの暑さのせいかな少しばてている。今もソファーに寝転んではいるが視線は宙をさまよっている感じだ。

「まったく。タマモは鍛え方が足りないからこうなるんでござるよ！ 少しは拙者を見習って欲しいものでござるな！」

「……あんたに見習うところがあるなんて初耳だわ。熱で馬鹿な頭がさらにおかしくなったんじゃない？」

声は弱弱しいが毒気はたっぷりである。

「なんと！？ タマモの癖に生意気な！」

「……馬鹿犬に馬鹿って言って何が悪いのかしら？」

さらに煽るタマモ。シロが叫び声とともに、今にも飛び掛りそうになった瞬間、

「うるさいわよシロ！！ いい加減にきなさい！！」

美神の怒声で動きが止まるシロ。

「しかし美神殿、タマモが……」

「言い訳するならご飯上げないわよ!!」

「キャイン!？」

小さくなるシロ。彼女にとってご飯ヌキは相当厳しい罰なのだ。

「タマモもそろそろ準備しなさい」

美神に言われてタマモは渋々と言った感じで立ち上がる。

「それで美神さん、ヨコシマはまだなの？」

美神は時計に目をやると、バイトの時間が一時間も過ぎていることに気づく。

「時給少ないくせに遅刻するなんて、何考えてんのかしら？」

そう呟くように言うとなタマモは準備をしに部屋へ戻った。

「先生にも用事があるに決まっているでござるよ。そうであろう？
美神殿」

遅れている理由がわかる美神としてはその言葉には答えず、またファイルに目を落とした。夕日が沈んだからそろそろ来るだろうと思
いながら。

タマモが準備を終え、部屋に戻ろうとしたその時、

「すみません!! 遅くなりました!!」

横島の声が聞こえた。タマモはようやく来たかと思いながら部屋に
入る。

「お詫びにこの不肖横島、一晩あなたのお供をつう!？」

飛び込んで行く横島と、ファイルを投げて打ち落とす美神という見
慣れた光景がタモの前に広がった。

「さて、それじゃ準備するわよ。横島クン、遅刻分は引いとくから」
タマモは呆れた顔で横島を見る。

「本当に何考えてんだか……」

「……せんせい……」

シロとタマモの呟きに美神は苦笑するしかなかった。

準備を済ませ夕食を取ったので依頼の説明に入る。

現場は高台にある高校。七夕の日の夜中、見回りをしていた警備員が使われなくなって久しい文芸部室から誰かを呼ぶような声を聞いた。最初は勘違いと思った警備員も、止まない声が気になり、同僚と一緒に文芸部室を空けようとしたが、いきなり『違う!!』という声と同時に弾き飛ばされたという。翌日オカルトGメンに調査を依頼したが、一月半たっても解決の目処が立たない。あと二週間で学校が始まるのでそれまでには解決したいというのが学校関係者の気持ちだった。

「本当に何もわからなかったの？ Gメンなら何かしらの手がかりは掴んでいると思うんだけど？」

「そうでござるな。西条殿と美知恵殿がいて何もわからなかったとは考えられないでござるよ」

シロとタマモは西条と美智恵を思い浮かべながら質問する。彼らには一定の評価をしているので何もわからないというのが気にかかったのだ。

「西条さんもママも本部に出張中なのよ。大事な会議とかであと三週間はかかるらしいわ。だから今のGメンのメンバーじゃ手に負えないって事で西条さんがうちに依頼してきたの」

「なるほど。だから受けたんですね。」「学校関係の依頼なんて経費かさんで赤字にしかならない」って言ってたのに。西条のポケットマネーですか？」

「ママには内緒だけだね」

「……隊長なら知ってそうですね……」

「そ、それはそうと、今分かっていることをまとめましょ。はつきりしていることが三つあるわ」

美神は一瞬顔を青くしたが、考えないようにしたのか、話題を変えた。

「昼間は何の問題もないってことと、満月が近づくにつれ声ははっきり聞こえるって事ね。最後が一番重要なんだけど……うちに依頼

が来た理由はこれが本当のところらしいわ」

横島がそれは何ですか？　と言った表情で美神を見る。

「灵力でも魔力でも妖力でもない力が発生しているらしいの……」

「「――」」

三人は一斉に沈黙した。

「それじゃお疲れさまでした!!」

その沈黙を破るかのように、一際明るい声を出した横島が出口に向かって飛び出そうとする。

「またんかい!!」

その動きを読んでいたかのようにすばやく横島の首を捕まえる美神。

「いややー!!　知らない人に付いていったらあかんのやー!!」

知らない力に出会ったら逃げるんやー!!」

「あんたには文殊があるでしょ!？　いざって時にあんたが必要ない

んだから逃げるな!!」

とたんに大人しくなる横島。

「美神さんが俺を必要としている!？　これはもう愛の告白以外にない!」

そう呟くと、美神に向き直る。

「未知との力の前に、未知の世界にいきましょウツ……!!」

「一人で逝って来い!!」

飛び掛かった横島にカウンターで拳をお見舞いした美神は横島の足を持ち、シロとタマモに向かって言った。

「ほら、出発するわよ。この荷物も乗せといてね」

「「……」」

最早お決まりのやりとりなので深く考えず美神の言いつけを守る二人であった。

3.

高台に建てられた学校が満月に照らされている。その校舎の前に四人は並んでいた。報告にあった通り灵力でも魔力でも妖力でもない、

もつと別の力がこの学校にあることがわかる

「何よこの感じ……」

「せせせ、先生？ これは一体なんでござるか？」

タマモは両腕を抱き、シロは横島に抱きついている。未知のものに対して警戒する本能が余計に不気味さを感じさせているのだろう。

「お、お、俺がわかるわけないだろう！？ いい、一体なんですか？ みみ、美神さん！？」

そんな二人の感じが伝わったのか、横島の声も震えている。

「――」

美神は返事をしない。美神にもこの異質な力がわからないでいるのだ。とその時、

『――は――る』

かすかに何かを呼ぶような女の声が聞こえた。

「「「――っ！！？」」」

美神以外の三人は思わず息をのむ。美神も冷や汗が伝わるのを感じた。

「わからないわ。とにかく調べてみるしかないわね」

そう言うとき美神は神通昆を持ち、周囲に注意を払いながら文芸部室へと足を向ける。三人も同様に注意を払いながら後ろに続く。文芸部室に近づくほど声は大きくなるが何を言っているかはまだわからない。フィルターがかかっているような感じなのだ。

「ここね。シロあんたは扉の前に」

「わかっているでござるよ」

前衛にシロと美神、後衛に横島といった布陣をとる。

「横島くん、霊視ゴーグルを」

いつものように大荷物になっているバッグを廊下の端に下ろし、霊視ゴーグルを取り出そうとしたその時、

『見つけた！！』

声が響いたと思うと部室の扉が勢いよく開いた。その中から半透明の青い手が伸びてきた。

扉の前に立っていたシロは、扉が開いた瞬間に危険を感じ、咄嗟に美神を押し倒すようにして飛びながら叫んだ。

「先生！！ 危ないでござる！！」

自分の真後ろに横島が立っていたためだ。横島も反射神経はいい。声が聞こえた瞬間に扉のほうを向いていたので手が伸びてきているのはわかった。シロの叫び声と同時に、美神たちがいる方と反対側に飛ばうとした。しかしその手はいきなり方向を変え横島の方へ向かってきた。

「何じゃこりゃ！！？」

「横島クン！！？」

「先生！！？」

「ヨコシマ！！ こっち！！」

横島の隣にいたタマモは手を伸ばし、自分の方へ横島を引き寄せる。

「うわっ！！！！？」

「何よこれ！！！！？」

しかしここでも手は急に方向を変えたのだ。あまりのことで反応が出来なかった横島とタマモは、その手に捕まえられた。美神は神通毘に霊力を通し、手に向かって攻撃をする。シロも同じように霊波刀を出し、タマモも狐火を出し手に攻撃をする。

「すり抜けた！！？」

三人の攻撃は空振りに終わった。

「横島クン！！ 文殊を！！」

「わかってますよ！！！」

叫ぶ美神に答えながら、横島は文字を思い描いた。《脱》この手から抜け出せるようにと念じた文字。

「うわっ！！！」

「きゃっ！！！」

しかし横島が文殊を発動させる間もなく、半透明の青い手は扉の中に引き込まれていった。

「横島クン！！？ タマモ！！？」

美神とシロが同時に扉に向かって叫ぶ。だが、扉は開かないままだった。

横島は激流に飲まれたような衝撃を感じた。一緒に巻き込まれたタマモが気になった。

「タマモ!!」

「……」

叫ぶように呼んだが返事はない。どうやら急な衝撃で気を失ったようだ。横島はタマモを抱きしめた。

「絶対に守ってやるからな!!」

守れるものを守れなかった痛み……今日見た夕焼けが余計にそれを感じ出させる。

しばらくすると衝撃は収まった。ゆっくりと目を開けると――

「……貴方達はいったい何者ですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8347u/>

茜と金色

2011年10月9日11時45分発行